

三浦 絞 り

秋田県平鹿郡平鹿町浅舞では三浦絞りの技法は「なるみ」と呼ばれていた。これは、三浦絞りが木綿の絞り染め産地として有名な愛知県の有松、鳴海で盛んに行われた技法であることに由来するといわれている。絹絞りでは面を絞りつぶすとき、鹿子絞りをを用いることが多いが、木綿絞りでは面を三浦絞りで絞りつぶしたものが多い。三浦絞りは、そのひとつひとつの粒の中の模様を貝の剥き身や鳥の雛に見立てて「むきみ絞り」「ひよこ絞り」などとも呼ばれていた。むきみ絞りは近世～近代初頭の浮世絵版画にも浴衣姿等として多く登場し、人気の高い絞りであったことが推測される。



近世末の風俗に見られる三浦絞り

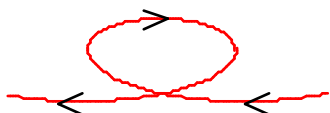
古い三浦紋を見ると、絞った粒が真っ白に抜けないで、染料が絞りの中までしみこんで、薄青く仕上がっているものが多い。これには括り糸をあまり強く締めないで染料を強く浸透させたものと、一度三浦紋を解いてから浅黄を染めたものがあるとみられる。

「なるみは強く絞ればよいというものではなく、ギュッと締めてから、フッと一息ゆるめるのがコツ」と教えられたと言う話を浅舞出身の女性が話していた。

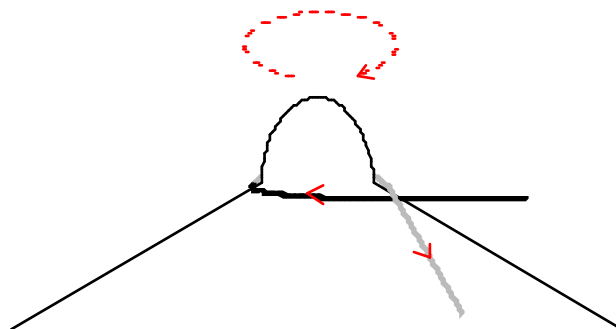
1) 三浦紋を絞る

三浦紋は三浦針と呼ばれる鉤針を用いて絞る。

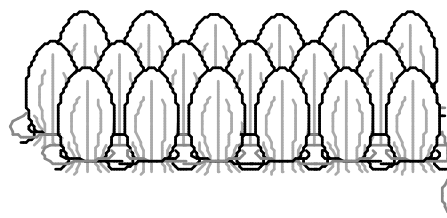
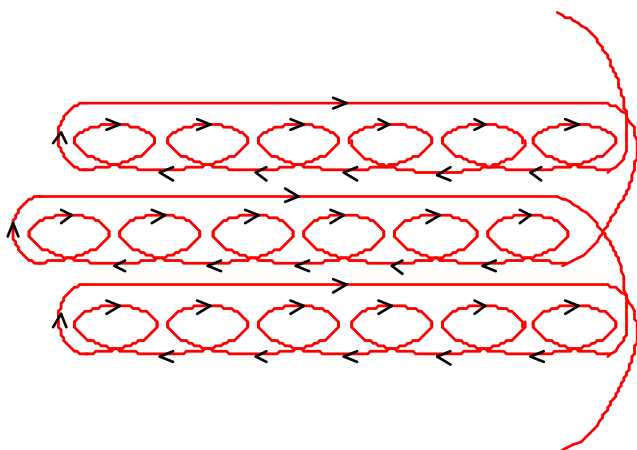
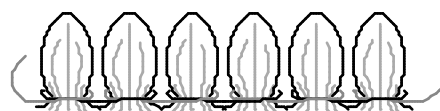
鹿ノ子紋では粒の根元に何回かくり糸を巻き、糸を被せて止めてゆるまないようにしてから隣の粒を絞るが、「三浦紋」では粒の根元に括り糸を1回巻いて引き締めるだけで止めないで隣の粒を絞る。布を指で突き上げた粒に糸を一巻きするだけで、結んで止めずに粒の頂上に針を掛けて糸を引き締めた状態で次の粒を指で突き上げて糸を巻きつける。次の粒、次の粒と一巻きだけ糸を巻きつけて次々と絞っていく。絞りは右から左へと進める。左端まで絞ったら糸は止めずに、今絞った粒の列の後ろを回して列の始めの粒の外側に回し、かぎ針をこの粒に掛けて糸を軽く引いて緊張させて保持し、次の列の先頭の粒を指で突き上げて括り糸を掛け絞り始める。糸は粒の列と列の間を回って右端に戻り、絞りは右から左、右から左とすすめ、逆方向に絞ることはしない。くり糸は一巻きしかしておらず、結んで止めていないため、あまりゆるく絞ると作業中に糸が解けてしまう。解けるのを恐れて、きつく絞ったり、余分に糸を巻いたり、糸を結んだりすると、その部分の染め上がりが他より白くなってしまう。



指で布を突き上げ糸を1回巻き付ける。絞りははじめは引き輪結び等にして、解けないようにする。



右から左へ絞っていく。



端まで絞ったら、粒の列の後ろに糸を回して右端にもどり次の列を絞る。次の列は前の列の粒と粒との間を絞る。

絞り糸は、写真のように糸巻きに巻いて用いる。糸が擦れて指を切るので、保護をする必要がある。

絞り糸がゆるまぬように、常に糸を張りながら絞っていく。難しそうに見えるが、ちょっと慣れると楽に絞れるようになる。

写真の例では絞り位置に印を付けているが、次の絞り位置は指がすぽっと入るようになっているので、その感覚がわかると印なしで指先の感覚だけで絞っていけるようになる。



鈎針

①



布を下から指で突き上げ、糸をひと巻きする。針は前の粒にかかっている。

②



糸を巻きつけた粒の頂点に針を掛ける。左手は巻きつけた糸を摘んでいる。

③



左手を下げ、粒をテント状に張る。粒の中の指は抜けるが、糸は逃がさないように。

④



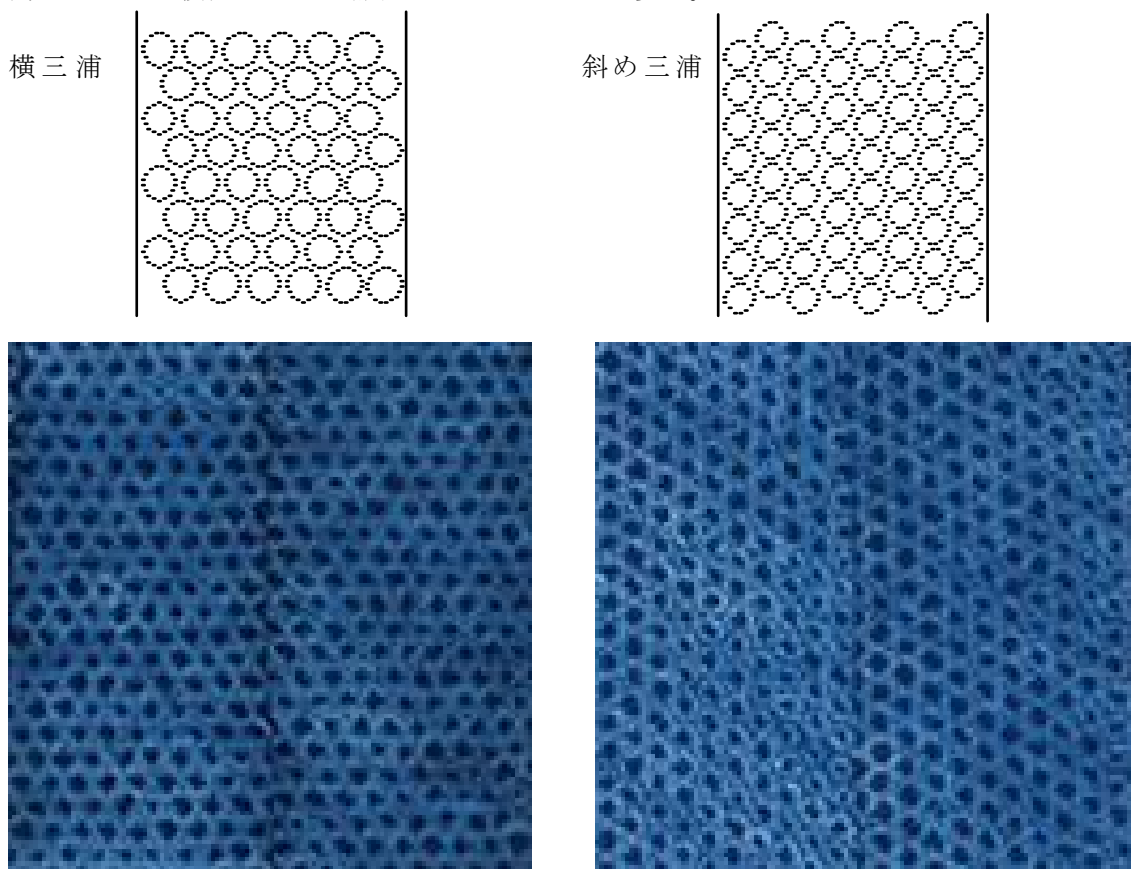
右手の糸を引いて巻き付けた糸をざっと締める。左手で摘んでいた糸ははなす。

⑤



粒の裾の皺を整えて、糸をぎゅっと締め。→次の粒を指で作る。→①へ

三浦紋には、布地に対して直交する方向に（真横に）そろえて絞った「横三浦」、斜交する方向にそろえて絞る「斜め三浦」、粒の大きさを揃えず任意に大小取り混ぜて絞る「やたら三浦」等がある。また、布地全体を絞りつぶす総三浦の他に、モチーフの意匠の間を埋める地模様として三浦紋を用いることも多い。



これまで述べたように、三浦紋ではなくくり糸を止めないのが本当であるが、初心者の場合、最初の内は粒の列の始めと終わりにかぶせ止めをして絞る。30cm程も絞り進むと、絞った部分が外に反るようになり、初心者でも端でかぶせ止めをしないで絞っていけるようになる。染め上がった布の始めの方で両耳が白っぽくなるが、実用上はさほど問題はない。

2) 三浦紋の染め

三浦紋のむきみ模様が立体的にきれいに出るかどうかは染め作業の如何による。どんなに上手に絞っても、いきなり強い藍に入れて染めると、ゆがんだ白い輪が並んでいるだけの染めになる。

染めに先立って布は水に浸漬しておく。最初の染めでは、浸漬した水をよく切って少し乾かし、少し水分があるかなと言う状態で、弱い藍で染める。これによって絞りの奥まで浅黄色が入る。浅黄が充分発色したら、次からは強い藍（濃色）を染めていく。2回目からの染めは水分を強く切らない状態で染める。先行している水分のため強い藍は中まで浸透できずに、外側の液に触れている部分のみを濃色に染める。濃色の染めを繰り返して希望の濃さにまで染める。このような染め方によって、むき身模様はグラデーションの効いた立体的な文様として染められる。一回目の染めの前の水切りは脱水機で行っている。発色は、細かく絞られているのでなかなか中の方まで進まない。タオルなどで余分の水気を取り発色を早める。2回目以降の染めは、このタオルで水気を取った程度の水分で行う。藍の染液はハイドロ建てすると往々にして還元が強くなりすぎるので、染め重ねを長時間やると布についた藍まで還元されて、染め重ねた割には濃くならない。染め重ねは浸漬時間でなく、布の藍の色の戻りをみながら行うことが必用である。



横三浦紋浴衣 平川悦子／秋田市



斜め三浦紋浴衣 高橋キサ／千畑町



中野竹子／秋田市



川村悦子／山本町



水戸瀬禮子／天王町



与良久子／井川町



渡辺容子／秋田市



藤原タカ／秋田市



平川悦子／秋田市



中野竹子／秋田市



佐藤久美子／秋田市



澤井幸子／秋田市